

# ユーモアと暗闇の弁証法

——フィッツジェラルドの“Financing Finnegan”  
 における借金，身体，貨幣——

坂 根 隆 広

## 1. はじめに

1939年12月、F・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald）は、編集者のマックスウェル・パーキンス（Maxwell Perkins）に宛てた手紙で、金を貸してくれることへの感謝を述べてから、次のように述べる。

Max, you are so kind. When Harold withdrew from the questionable honor of being my banker I felt completely numb financially and I suddenly wondered what money was and where it came from. There had always seemed a little more somewhere and now there wasn't. (*A Life in Letters* 427)

Harold とは、フィッツジェラルドの著作権代理人（literary agent）であったハロルド・オーバー（Harold Ober）を指す。作家がデビューした当時から関係の深かった人物だが、この手紙が書かれた時期の約半年前に、それまで長年続けてきた、短篇の出版などで生じるはずの印税収入を最大限に見積もって、作品を書き始める前から前払い（advance）で渡すという習慣をやめることを作家に通知した。その結果、フィッツジェラルドは実質的にオーバーとの関係を断ち切り、直接出版社や映画会社とやり取りするようになる。文字どお

り、金の切れ目が縁の切れ目となったわけだ<sup>(1)</sup>。

作家としてデビューする前、1919年に、およそ半年を広告代理店で勤めた以外は、社会での経験がなく、デビュー以降は職業作家として生計を立ててきたフィッツジェラルドにとって、お金とは何よりもまず、短篇を書くことから来るものであった。それは言いかえると、代理人であるオーバーから前倒しというかたちで、つまりは借金という形式をとって来るものだったということだ。その借金をめぐる関係が崩壊して金のやりくりにつまらなくなったとき、この作家は、「貨幣とは何か、それはどこから来るのか」という根本的な問いに直面したように見える。

示唆的なことに、印税の前払いという形式に依存したフィッツジェラルドの財政的習慣は、当時の時代状況と明確に呼応していた。後に触れるデヴィッド・グレーバーによる労作に言及するまでもなく、借金は貨幣の発生と同じくらい古くから存在する事象だともいえようが、他方で、第一次大戦以降の米国において、借金をめぐる制度的環境と心理的条件が抜本的に変化したこともまた歴史的な事実である。自動車の広範な購入を可能にすべく、多くの金融会社（**finance company**）が設立され、個人信用貸し（**personal loan**）が法制度化されて、それまでの高利貸し（**loan shark**）による庶民の搾取の減少に寄与しただけではない。それに加えて、分割クレジット（**installment credit**）をめぐるシステムが普及した結果、借金を背負うことに対する人々の心理的・経済的ハードルが著しく低下し、不動産市場の好況に伴う住宅ローンの増加とも相まって、負債を抱える人々の数が急増したのも、この時期だとされる<sup>(2)</sup>。

古くからある借金という事象が、ローカルな個人の問題を超えて、社会経済システムの根幹の一つとして制度化された時期に、フィッツジェラルドは借金をして書くという習慣を深めていき、さらに、大恐慌を経て破産者が激増するなかで、彼自身の借金も急速に膨らんでいった。むろん、オーバーは文字どおりの“**banker**”でも高利貸しでもなく、この点は決して軽んずるべきではない。だが、急激に複雑化する、商品としての文学作品をめぐる煩雑なビジネスを引き受けていた代理人からの借金は、友人や知り合いから借金をする、とい

う個人的関係をとおした借金とは、大きく性質が異なるのもまたたしかだ<sup>(3)</sup>。事実、たとえば1940年に友人に金を無心したとき、フィッツジェラルドは、これは自分にとって「最初の個人的な借金」(“the first personal debt”)であると強調している(A *Life in Letters* 463)。代理人や編集者から借りる金については、ビジネスまたは職業上の借金であるという風に、彼のなかでは明確な区別があったようだ。

以上のような背景を前提にしたとき、自分自身と、オーバーおよびパーキンズとの、借金をめぐる関係をフィッツジェラルドが自伝的に扱った短篇、“Financing Finnegan”(1938)が、興味深い作品として浮かび上がってくる。この作品は、1937年、フィッツジェラルドがその生涯で最も深刻な借金にあえていた時期に書かれた。自らの生活費に加えて、娘の高校の授業料、精神を患う妻の病院での治療費を払わなければならないにもかかわらず、中々まともな短篇が書けないし、書いても売れないという苦境に陥った彼は、この作品が書かれたのと同時期に、MGMと契約してハリウッドに転居した。

自身の借金をめぐる状況について、自嘲的に、ユーモラスで軽妙な筆致で書かれた、ケンブリッジ版にしてわずか9ページ足らずの作品は、後期の短篇では重要な作品とされつつも、まさにその短さと軽妙なタッチゆえに、フィッツジェラルド批評において正面から論じられることは少なかったといえる<sup>(4)</sup>。

しかしこの作品は、単に作家の現実的な状況をユーモラスに記録するだけではなく、そこでは凝縮されたかたちで、負債を背負うことについての作家の透徹した考察が、倫理や身体、拘禁、貨幣、約束といった、借金という問題との関係で必然的に重要となる主題の濃密な連関を介しながら描かれている。本稿では、上述したような歴史的背景との共振を考慮しつつ、本作品において借金を背負う作家がどのような存在として描かれているかを検討したい。

## 2. ユーモアと書くことの非-倫理

決して有名な作品とはいえないので、まずは、“Financing Finnegan”のあ

らすじを簡単に確認しておこう。“Financing Finnegan”という題名でありながら、この短篇で、フィネガン本人が直接登場することはない。主な登場人物は、フィネガンの代理人であり、オーバーがそのモデルであるキャノン (Mr. Cannon)、またフィネガンの編集者であり、パーキンズがモデルであるジャガーズ (George Jagers)、そしてフィネガンと同じ代理人と編集者をもつ匿名の語り手である。

語り手はフィネガンと直接の知り合いではなく、キャノンのオフィスを訪ねてもちょうどいれ違いになるなどして、最後まで出会うことはないままであり、キャノンとジャガーズとのやり取りをとおしてフィネガンの状況を知る。作家として輝かしい過去をもつフィネガンだが、最近ではスランプに陥っていて、キャノンとジャガーズに多額の借金を背負っており、生活もままならないことがわかる。フィネガンは小説の素材を集めるべく、文化人類学者と北極に向かい——といってもこの文化人類学者とは、女子学生であることが後に判明するのだが——その資金をキャノンとジャガーズが出資する代わりに、フィネガンは生命保険の受取人を二人に変更する。その後、フィネガンの一行が北極で行方不明になり彼は死んだと思われるが、しばらくして生きていたことがわかり、キャノンは彼から、ノルウェーから帰国するための送金を要請する電報を受けとる。

以上が本作品のあらすじである。借金の問題との関連でまず考えてみたいのは、この作品において、スランプに陥るフィネガンが再び作家として成功することと、借金が返済されることが結びつけられていることの意義だ。これは作品全体を貫く連関だといっていいが、それがもっとも鮮やかに表出するのが、物語の結末においてである。

フィネガンにノルウェーから送金を要請されたキャノンは、銀行が閉じているために、秘書らから金を集めるが足りず、そこにいあわせた語り手から金を借りる。しかしこの件が落ち着いたあともキャノンに貸した金が帰ってこないことについて、語り手は結末部で次のように述べる：“I imagine, though, that someday I will surely get it because someday Finnegan will click

again and I know that people will clamor to read what he writes” (58). この語り手による叙述は、書くことについてのフィネガンの強固な意志を前提にしたものである。作品全体をとおしてその意志は強調されているが、特に印象深いのは、フィネガンは肩の骨を折っても、書くことをあきらめずに、あお向けに寝たままものを書く装置を作らせたという、ジャガーズによる報告である(52)。これは実際にフィッツジェラルドが経験した怪我をモチーフとするものだが、フィネガンは、書くことをやめない不屈の精神をもった、高度に倫理的な作家として描かれている。しかし結末部からの引用も示すように、作品は全体として、ユーモラスなかたちではあれ、彼の職業倫理を、多額の借金を背負った者の返済義務と同一視している。

近年の借金・負債をめぐる理論的考察は、その基本的な枠組みを多くのケースにおいて、ニーチェの『道徳の系譜』の第2論文、「〈負い目〉、〈良心の疚しさ〉、およびその類いのことども」に依拠している<sup>(5)</sup>。そこでニーチェは、次のように述べる。「これら在来の道徳系譜学者らは、たとえば〈負い目〉(Schuld) というあの道徳上の主要概念が、はなはだもって物質的な概念である〈負債〉(Schulden) から由来したものだということを、おぼろげなりと夢想したことがあるだろうか？」(431)。良心、責任、そして「負い目」の起源の一端を、ニーチェは人間の「約束」する能力に求めながら、その約束の原型を、債務者と債権者の関係に見出している。

道徳とは人間に本来的に備わっているものであるというよりは、むしろ債務者と債権者という不平等な関係において形成された概念であるという、挑発的な議論をニーチェは提示する。このニーチェの議論は、フィネガンの作家としての深く倫理的な態度が、キャンノン、ジャガーズと、フィネガンとの間にある、根本的に非対称的な債権者-債務者という関係と表裏一体のかたちで描かれる、という事情を説明してくれるように思われる。「この作家が仕事をするには、借金によって生じる罪悪感が必要であった」ということを、フィッツジェラルドとオーバーの手紙のやり取りは示すと、James L. W. West III は端的に述べているが<sup>(6)</sup>、その罪悪感はまた、この作家の職業的倫理そのものの

根拠にもなっていることを、“Financing Finnegan” という作品は示唆する。

しかしながら、このように書いてみてすぐさま気づかされるのは、この作品にはフィネガンの罪悪感、負い目、後ろめたさは、少なくとも表面的には、描かれていないということだ。それは彼がこの作品で不在である以上、当然ともいえるが、むしろ事情は逆で、フィネガンの負い目や罪悪感を書かないための一つの方策として、彼が現実には出てこない、という形式が採用されているようにも思える。

罪悪感どころか、作品のユーモアの根幹をなすかたちで、フィネガンの「不道徳」(immorality)、あるいは非-倫理性とでも呼ぶべき性質が示唆されている点に注意したい。真っ先に思い浮かぶのは、先にも触れた、キャンノンとジャガーズからの融資によって実行された、フィネガンの北極への探検が、女子学生と行っていたという事実が判明することだが、この作品が暗示的に言及しているおそらくはより重要な「不道徳」に、飲酒という問題がある。

**Finnegan** というアイルランド系の名前は、英米文学の読者にはジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』を想起させるが<sup>(7)</sup>、ここで参照したいのは、ジョイスその人もまた言及するところの、19世紀後半に米国で発表され、その後も人気を博したアイルランド系のバラッド、“**Finnegan’s Wake**”である。その歌において、レンガを運ぶ仕事をする、酒好きのティム・フィネガン(Tim Finnegan)は、酔っ払って梯子から落ちて死んでしまう。しかし彼の「通夜」(“wake”)の騒ぎの中でウィスキーが死体にかかるとうフィネガンは復活(“wake”)する<sup>(8)</sup>。この歌の、コミカルな死と復活のモチーフは、“Financing Finnegan”におけるそれと奇妙にも合致する。

このモチーフの類似をもって、フィッツジェラルドの作品が、“**Finnegan’s Wake**”を暗に下敷きにしている、とまではいえないかもしれない<sup>(9)</sup>。しかし気になるのは、あえてアイルランド系の名をもつ人物を(不在の)主人公としながらも、“Financing Finnegan”には(歌とは対照的に)酒が出てこない、より正確には、フィネガンがアルコール依存症である、という描写が出てこない、ということだ。1937年に発表された“An Alcoholic Case”など、この時

期に書かれた主要な作品はフィッツジェラルド自身のアルコール中毒を戯画化するようなものが多いことを考えると、この設定はなおさら不自然に思える。

この不自然さを前提にしたとき、“**Finnegan’s Wake**”とフィッツジェラルドの作品が、水と落下というモチーフを共有していることが注目される。“**Finnegan’s Wake**”における復活は、ウイスキーが、その語源との関連で“**water of life**”とも呼ばれることを利用しているのだが、歌の中でフィネガンが酔っていることは、“**full**”という形容詞で表現されている（“**One morning Tim was rather full**”）。“**Financing Finnegan**”で複数回にわたって言及される表現として、フィネガンがプールに飛びこんで肩の骨を折ったとき、噂ではプールの水は“**half-empty**”であったが、実際には“**full**”であった、というものがある（51, 54, 58）。他方で、怪我をしたけれど、もうフィネガンは大丈夫だと言いながら、彼は“**full of life and hope and plans for the future**”だとジャガーズは述べる（52）。“**full of water**”（51）や“**full of life**”というフレーズが、“**Finnegan’s Wake**”における“**full**”という言葉の想起を介して、「酒」（“**water of life**”）を連想させる、というのは強引に響くかもしれないが、酔って（“**full**”）梯子から落下するフィネガンと、水で満ちた（“**full**”）プールに飛びこんで骨を折るフィネガンがどこか重なるのはたしかだ。“**Finnegan’s Wake**”との連想を通じて、暗に、フィネガンの失敗や復活を酒に結びつけるような、微妙な遊びがフィッツジェラルドの作品では展開している、そのように想定するところまでは、許されるのではないだろうか。

ではなぜこのように「酒」は前景化されず、しかし背後に見え隠れする、というかたちで描かれるのだろうか。そのヒントは、作者の伝記的事情に見出せるかもしれない。作品中、語り手が図らずも、キャノンとジャガーズの電話での会話を聞いてしまい、次のように考える部分がある。

I understood it all now. The two men had entered into a silent conspiracy to cheer each other up about Finnegan. Their investment in him, in his future, had reached a sum so considerable that Finnegan

belonged to them. They could not bear to hear a word against him—even from themselves. (54)

キャノンとジャガーズがフィネガンを心配するような描写だが、“belonged”という動詞は、負債を負う債務者と債権者の間にある所有・被所有関係を明示しているともいえる。注目すべきは、“a silent conspiracy”という、この文脈では肯定的な意味で捉えられるものの、不吉にも響く言葉だ。この表現は、1934年、フィッツジェラルドにとってもっとも困難だったとされる時期の初期に、彼がオーバーに書いた手紙を想起させる。

After rereading your letter there were some things I felt hadn't been sufficiently answered. The first is that I have a deep suspicion that you and Max got together at some point and decided I needed disciplining. Now I know of my fondness for you both and assume that it is reciprocated and I know also that when one man is in debt to another he is rather helpless in such matters. Nevertheless, the assumption that all my troubles are due to drink is a little too easy. (*A Life in Letters* 273)

編集者と代理人にとって、作家の「問題」(“troubles”)とは原理的には、その作家が(売れる作品を)思うように「書けない」、という問題以外にはなく、ここでも基本的にはそのような意味で捉えてよい。パーキンズとオーバーが結託して、フィッツジェラルドが「書けない」ことの根源は飲酒にあると考え、彼を罰すること(“disciplining”), すなわち、彼の飲酒という不道徳を矯正することが必要だと考えたとき、深い疑いの目を作家が二人に向けていることが、この手紙からはわかる。その疑いは、借金を背負う存在はその相手に対して「無力」(“helpless”)であるという、債権者-債務者関係が必然的に有する権力関係についての認識を前提としている。債務者たる自らの飲酒と、作家とし



て書けないことがつなげられてしまい、債権者という上位の立場から二人がそれを正そうとしている、そのような共謀関係を作家はみてとったということだ。その背後には、フィッツジェラルド自身の、借金、飲酒、そして書けないことについての「負い目」があっただろう。つまり現実には、それらが結びついているのは、編集者と代理人にとってではなく、フィッツジェラルド自身にとってであったと考えられる。

フィネガンの飲酒が描かれず、しかしおそらくは“Finnegan’s Wake”との連想を介して飲酒に言及する“Financing Finnegan”において、フィッツジェラルドは、書けないこと、借金、飲酒、罪悪感という結びつきを断ち切りつつも、作家の復活には飲酒が必要なのだという遊びのような主張をしているのではないだろうか。

この作品において、後ろめたさを感じるのは、フィネガンではなくて、むしろキャンオンやジャガーズ、そして語り手である。キャンオンは、「原則的には誤っているとわかっている」けれども金を貸すのを断れないと言い(55)、語り手は、フィネガンの電報を盗み見てしまった罪悪感を告白する(52)。また、キャンオンとジャガーズの、常に物思いに耽って語り手への反応が“Oh”と一歩遅れる滑稽な様子は、フィネガンの借金問題によって、彼らが内面に沈潜する感覚を伝える。その様子がなおさら、フィネガンの凶々しさと暗示的な不道徳性を際立たせるという格好になっている。

借金という現象が直接的な債権者を超えて、間接的な債権者たる語り手にまで生み出す罪悪感の連鎖を描きつつ、他方では、債務者の罪悪感、作家として書き続けることの不可能性、そして飲酒という問題が必然的に等号で結ばれてしまうという、その結びつきを、作品全体のユーモラスな感覚を利用しながら戯画化することで問いなおし、そのタイトな結び目をほぐそうとする、そのような作者のしたたかな戦略がここにはあると思われる。

### 3. 拘束される身体

けれども以上のような読み方は、作品のユーモアに対応するかたちで、ある種の楽観性、つまり、借金の示す論理と倫理を戯画化、相対化しうる、という感覚を前面に出しすぎているかもしれない。この短篇には、一見したところの軽妙さからはほど遠い、暗がりや潜んでおり、ユーモアと、そのような暗がりの、両方を見なければ、この作品の核心にはたどりつけないように思われる。

その暗い側面を考える上で、有効な手助けとなる作品が、晩年に書かれたパット・ホビー (Pat Hobby) 物語のなかにある。

パット・ホビー物語では借金を扱う作品がいくつかあるが、なかでも“Pat Hobby Does His Bit” (1940) という作品は、真正面から借金問題を描いた小品だといえる。ローン会社 (“North Hollywood Finance and Loan Company”) に金を払わなければ車を没収されてしまう、という状況に陥っている脚本家のパットは、必死で金を人から借りようとするが、うまくいかない。金の無心をしている間に誤って映画の撮影に映りこんでしまったパットは、成り行きから、あるギャングの一員を俳優として演じることになる。その役は、爆発を引き起こして自分も死ぬというものだが、撮影の前になると、突然パットは服を脱がされて鉄のプロテクターを着せられる。何事かと彼が尋ねると、彼は浅い溝に横になって、その上を自動車が過ぎていくのだと聞かされる。パットは抵抗しようとするものの、撮影現場にローン会社の集金係がいるのに気づき、その場で映画監督にお金を「前払い」 (“advance”) してもらう約束をとりつけて、撮影を実行する (154)。車が近づいてきたところから彼に記憶はなく、気がつくとは彼が闇の中で横たわっている。助けを呼んで聞いてみると、車が横転して、運転をしていた俳優が足の骨を折った騒ぎの中で、彼のことを皆忘れてしまったことがわかる。怒りを覚えながらも、自分がこれを機に人に再び認められる存在になったとパットが満足を覚えるところで話は終わる。

“Financing Finnegan” と同様にここでも、借金という主題が、明白に死と

復活というモチーフをとおして、ユーモラスに描かれている。フィネガンと同様、借金を支払うために、パットは擬似的な死を経験する。しかし皆に忘れ去られて一人溝に横たわるパットには、復活や再生という言葉にあるような明るさはない。彼が目覚めたときの描写はほとんどユーモアを寄せつけないものだ。

When he awoke it was dark and quiet. For some moments he failed to recognize his whereabouts. Then he saw that stars were out in the California sky and that he was somewhere alone—no—he was held tight in someone’s arms. But the arms were of iron and he realized that he was still in the metallic casing. And then it all came back to him—up to the moment when he heard the approach of the car.

As far as he could determine he was unhurt—but why out here and alone?

He struggled to get up but found it was impossible and after a horrified moment he let out a cry for help. For five minutes he called out at intervals until finally a voice came from far away, and assistance arrived in the form of a studio policeman. (155)

暗闇の中で身体を鉄によって拘束されながら身動きがとれず、助けを求めて叫び続けるというある種壮絶な場面は、フィッツジェラルドの描写でもほとんど例をみないものである。借金を背負う存在であることは、身体を拘束されるという物理的暴力だけではなく、さらにはその状態で人々から忘却されるという、より根源的ともいえる暴力を経験することである、という事実を、ストレートに表現しているといえる。

パットを覆う鉄のプロテクターは、「ギブス」(plaster cast) のようであったという叙述が作中にあるが(153)、これは“Financing Finnegans”において、肩の骨を折って身体を固定されるフィネガンを想起させる。拘束される身

体と借金という連関とは、実は“Financing Finnegan”の暗示的な主題であることを示す重要な記述が他にもある。フィネガンが北極で死んだらしいことを知った語り手は、次のように述べる。

I was sorry for him, but practical enough to be glad that Cannon and Jagers were well protected. Of course, with Finnegan scarcely cold—if such a simile is not too harrowing—they did not talk about it, but I gathered that the insurance companies had waived *habeas corpus* or whatever it is in their lingo, and it seemed quite sure that they would collect. (56)

ユーモラスな文章ではあるものの、“sorry”から“glad”という感想への転換のはやさが、債権者の保護への視点とセットになっていて残酷な描写だともいえ、語り手のアイロニカルな距離感とは、一面では、このような残酷な距離感でもあることを裏づける。“*habeas corpus*”とは字義的には、ある人物が不当に拘禁・抑留されていないかを確認すべく、拘禁された者を裁判所に連れてくるよう、拘禁した者に対して命じる令状を指す。*Oxford English Dictionary*によれば、このラテン語は英語では“thou (shalt) have the body”という意味だが、作品における生命保険とは文脈上関係ないであろうこの条項に語り手が言及するのは、“*corpus*”と“*corpse*”（死体）の類似から、生命保険を支払うには被保険者の「死体」(body)が必要である、というような決まりを念頭においているのだと考えられる。ここで起きている言葉遊びの複雑さは、ノルウェーで「トウキョクニコウリュウサレテイル」(“DETAINED BY AUTHORITIES”)という、フィネガンの電報における記述(58)、さらに、語り手らが金を支払うことでその拘束から彼を救済するという設定が加わることで、一層深みを増すことになる。

“*habeas corpus*”によって喚起される、拘禁された身体は、不在の死体とアナログカルに捉えられ、このアナロジーと、保険金の支払いによる借金の返

済、あるいは債権者の保護が、相関的に捉えられる。生き返ったフィネガンは当局に拘束されており、そうすると「人身保護令状」(“*habeas corpus*”)の対象となるという連想が読者には働くわけだが、それは“*have the body/corpse*”という命令の発動、すなわち死体になることであるという類推を導き、再生や復活という明るい響きは宙吊りにされる。溝の中で拘束されるパットは、まさに誰にも「人身保護」をされずに、忘却された死体として横たわり、そこで起きたことについての記憶の欠如が作品上の決定的な「不在」を構成するといえるが、実は“*Financing Finnegans*”におけるフィネガンの不在は、パットの不在と同等のニュアンスを有しているのではないだろうか。

負債を背負った作家であるとは、拘束された死体として地下に横たわり、世界から存在を忘れられながら、書くことによる復活という不可能を夢見ることである、そうフィッツジェラルドは主張しているのかもしれない。それはユーモアとして扱うにはあまりに暗く、作家としての倫理あるいは非倫理を基礎づけるには、あまりにも危うい土台ではなかったか。

#### 4. 貨幣とは何か

フィネガンの不在はこうして、一面では彼の「負い目＝内面」を描かないための方法だと考えられるものの、他方では、負債を背負った作家は、作品における表象の場から疎外され、拘禁された不在の死体としてしか表象されえない、という作者の暗い認識を示すといえる。自らを自伝的に描きながらもそこに自分は不在であるというユーモアにつながる形式が、ここでは一読した以上に、残酷な意味を帯びているということだ。

しかしながらフィネガンの不在には、拘禁という主題と絡むかたちでさらにもう一つ、重要な解釈を加える余地がある。結論からいえば、彼の不在には、退蔵された貨幣と、循環しないことによって無価値となった紙幣、という背反的なイメージが付与されていると思われる。貨幣とは何か、という問題がそこで暗にくり広げられているのだ。

鍵となるのは語り手がフィネガンの名前に言及する一節である。

His was indeed a name with ingots in it. His career had started brilliantly, and if it had not kept up to its first exalted level, at least it started brilliantly all over again every few years. He was the perennial man of promise in American letters—what he could actually do with words was astounding, they glowed and coruscated—he wrote sentences, paragraphs, chapters that were masterpieces of fine weaving and spinning. (51)

おそらく最初の文章は、“Finnegan” という音と、“ingots” という音の類似を前提にしていると思われる。一文無しのフィネガンについて使われるこの言葉が、アイロニカルな響きを有していることはいうまでもないが、問題はむしろ、そのアイロニーの構成の過剰な複雑さである。

ここで“ingots” という名詞は、二度くり返される“brilliantly” という副詞、さらに、“glowed” と“coruscated” という動詞を導いている。そのとき“ingots” は金塊がもつ重さよりもむしろ輝きを暗示し、光や炎、星の輝きを示すのに用いられる“coruscate” という動詞が逆照射的に示すのは、“ingots” の実体のなさ、物質性あるいは重さの欠如の感覚である。“ingots” は重い物質でもあるにもかかわらず、輝く金塊は、重さのない光のように見える、というのは、我々の一般的感覚にも合致するだろう。この“ingots” の二重性が、“the perennial man of promise” というフレーズと結びつくとき、“ingots” は明確に貨幣に近づく。借金を貨幣の起源に遡って考察するデヴィッド・グレーバーの言葉を借りるならば、貨幣としての金とは、「ありとあらゆるものと無条件に交換可能」という意味において、「物質的実体」であると同時に、「抽象」でもあり、「金属塊」であると同時に、「金属塊以上のなにか」であるといえる(366)。“perennial” という緑と自然のイメージを伴う永続的な“promise” とは、“ingots” がかもし出す「なにか」であるといつて、差

し支えないように思われる。ここでフィネガン、そして彼の言葉は、あたかも内在的な価値の表れであるかのように燦然と輝く金塊のような存在として提示されているといえる。

しかし“the perennial man of promise”とはいうまでもなく、この作品ではアイロニーに満ちた表現である。すなわちフィネガンにとって成功は、永続的に、「見込み」(“promise”) でしかない。そうであるがゆえに、借金という「支払いの約束」(“promise”) は守られることがない。語り手は、“what he could actually do with words was astounding”と述べるが、この作品において実際に出てくるフィネガンの言葉は、金を無心するために送られる2つの電報だけであり、彼の言葉が「行う」(“do”) こととは、一義的には、借金をする、ということにはほかならない。つまりこの一節は、作品を貫く借金の主題に満たされているわけだが、グレーバーが説くように、借金の論理とはつきつめれば、貨幣とは、それ自体で輝く金塊あるいは内在的な価値を有する商品であるよりは、債権者と債務者との間に約束によって構築された関係の表現である、という論理だといえる<sup>(10)</sup>。金塊のイメージをとおして伝わるこの文章の直接的な意味と、それを打ち消すような、作品全体の文脈に由来するアイロニーとの衝突はここで、貨幣についての異なる定義の相克を含意する。

実はその相克はすでに、“ingots”をそのなかにもつとされる“Finnegan”という名と、(語源的には借金あるいは身代金の支払いを意味する語である)“finance”が結びつく、この作品のタイトルに生じているともいえそうだ。

作品全体の文脈だけではなく、この一節が言及される文脈を考慮に入れたとき、貨幣のアナロジーという問題はさらに、フィネガンの不在についての考察へと接続される。この一節の前の場面で、フィネガンが翌日にオフィスに来ると述べるキャノンは、(伝説的な銀行強盗である)デイリンジャーが近くにいると知った銀行の頭取のようだったと語り手に形容される(50)。この比喩は、本稿の最初に引用した手紙で、フィッツジェラルドがオーバーを銀行家(“banker”)と呼ぶこととも共鳴するといえるだろう。キャノンはさらに、いくつかの雑誌は彼の作品を「押さえている」(“holding”)と述べる(51)。何

のためにそうしているのかと語り手に聞かれると、キャンノンはこう答える：“Oh for a more appropriate time—an upswing. They like to think they have something of Finnegans” (51). この直後に “His was indeed a name with ingots in it” という文で始まる段落が続く。

フィネガンの名前のみならず、彼の輝く文章もまた “ingots” であるとするれば、不景気の際には “ingots” を押さえておくという雑誌編集者もまた、銀行家のように思えてくる。そのような連想が、この場面全体で働いているからこそ、“ingots” を含む文が出てくるともいえる。銀行強盗としてのフィネガンと、“ingots” としてのフィネガンというのは、一見すると対極的なイメージではあるが、いずれも、貨幣のパブリックな場での循環から疎外されている点において共通している。銀行強盗によって、“ingots” はますます、紙幣あるいは硬貨が循環する空間からは不可視化されたところに隠されざるをえなくなるわけだ。この連想のネットワークにおいて、銀行強盗であるフィネガンはその性質上、パブリックな場＝作品という空間に出てくる余地はなく、他方で “ingots” たるフィネガンの作品は、銀行の金庫室 (bank vault) に隔離された存在として浮かび上がる。

ここでのアイロニーとはむしろ、その “ingots” とは、すなわち雑誌が押さえているところの原稿とは、現実には、景気の回復期に出版するためにとってあるのではなく、出版に値しない「紙切れ」にすぎないと考えられるということだ。その紙切れが、循環によって初めて信用と価値が生まれる紙幣と類推的な関係にある、というのは詭弁に響くかもしれないが、しかし発表され流通して初めて原稿は価値を有し、キャンノンへの借金の返済を可能にする、という前提があるからこそ、フィネガンの名前には “ingots” があるという文のアイロニーとユーモアが効いてくるのは間違いない。このとき “ingots” への言及とは、流通しない紙くずを、「流通せずともそれ自体に内在的な価値がある」と捉えなおす語り手の、皮肉を含んだやさしさと同時に、作者の自嘲的なユーモアを示すものとして解される。

こうして、このセクションの最初に引用した一節が示すユーモアと真面目さ



の弁証法は、紙くずと鑄塊（“ingots”）の弁証法であり、それは端的にいえば、貨幣の弁証法であるといえる。そのときフィネガンが不在であるのは、彼の言葉が、循環の外にありながらも循環の価値体系を支えるような“ingots”として機能しているからであり、しかし同時に、循環しないことによって価値を失った紙切れでもあるからだということになる。

## 5. おわりに

本稿の最初に引用した手紙にあるように、フィッツジェラルドは、オーバーとの関係が崩壊したとき、「貨幣とは何か、それはどこから来るのか」という問題に直面した。おそらくそこでフィッツジェラルドは強くこの問いを意識したということにすぎない。彼がオーバーとの間に結んだ関係のなかにすでに、この問いは構造的に埋め込まれていたと考えるべきであり、オーバーとの関係を問い直した“Financing Finnegan”という作品はおのずと「貨幣とは何か」という問いを焦点化することになったといえる。

また他方で、この作家にとって、「お金はどこから来るのか」という問いは、職業小説家であるとはどういうことなのか、そもそも小説はなぜ売れるのか、あるいは小説はなぜ売れないのか、小説の「価値」とは何なのか、広く流通する作品にこそ価値があるのか、あるいは作品はそれ自体に価値があるのか、という問いでもあっただろう。

“the perennial man of promise”とは、スランプに陥ってもなお書き続けるというフィネガンの不屈の精神、作家としての倫理を示している。それは同時に、約束は果たされず、フィネガンは借金を返すことはないというユーモアを含んでいるが、借金をフィネガンが（生命保険を介して）支払うとはすなわち死を意味する本作品のロジックにおいては、約束の実行を先延ばしにし、借金を払わない人物であることこそ、彼が唯一、物理的に生き残る術であることもわかる。負債とは「約束の倒錯」、あるいは「数字と暴力によって腐敗してしまった約束」だとグレーバーは述べる（578）。拘禁や死を含意する借金と

いう約束と、作家としての約束、その二つの約束の間に張りめぐらされた連想のネットワークを考察することで、本稿では“Financing Finnegan”という作品における、ユーモアと暗闇の弁証法とでも呼ぶべき入り組んだ動きを、多少なりとも明るみにだせたのではないかと思う。

最後に改めて触れておくべきは、オーバーもキャノンも、当然ながら銀行家ではない、という事実の意味するところである。“Financing Finnegan”において、語り手がキャノンに金を貸し、そうすることで間接的にフィネガンに金を貸すのは、「銀行が閉まっている」からである(57)。銀行や生命保険会社と離れたところでの、個人的な信用のネットワークによってフィネガンは拘束から解放され、そしてこのネットワークのなかで、作家としての復活を期待される。

本稿で議論してきたのは、いってみれば、この個人的な信用のネットワークを介した借金の関係を、必ずしもフィッツジェラルドは、資本主義的な搾取の関係の外部にあるものとして特権化していないということである。しかしながら蛇足を承知でいえば、本稿は必ずしも、キャノン、ジャガーズ、語り手とフィネガンとの関係が、資本主義的な関係に完全に包摂されると主張するわけではない。彼らの関係は、見た目以上に荒涼とした次元を有していることは重要ではあるものの、その関係がユーモアを生み出しうる限りにおいて、それは、債権者－債務者という関係の外部の存在を示唆する。ユーモアと暗闇の弁証法と述べたのは、そのような意味においてである。

#### 注

- (1) このあたりの事情の詳細については、Brucoli 449-56を参照。
- (2) 以上の説明は、Hyman 10-97を主に参考にしてしている。
- (3) オーバーを含めた19世紀後半から20世紀前半にかけての米国における著作権代理人の登場とその役割の増大については、West III (1988) 77-102を参照。
- (4) “Financing Finnegan”を正面から扱ったほとんど唯一の考察とっていいGeorge Monteiroによる論考は、作品の語り手とヘミングウェイの類似について主に分析したものである。Edward J. GleasonもMonteiroの主張を引き継いで、本作品におけるヘミングウェイ的な主題について触れている(Gleason 226-

- 27)。本稿はそういった指摘を否定するものではないが、Gleason も認めるように、全体としてはフィッツジェラルド自身への言及の方が、ヘミングウェイへの暗示的言及よりも重きを占めているという従来の見方に立っている。フィネガンとフィッツジェラルドの財政状況の類似を指摘した考察の一例としては *Man-gum 159-60* を参照。
- (5) たとえばラッツァラート 55-74, グレーバー 110-31 を参照。
- (6) Introduction, *The Lost Decade: Short Stories from Esquire, 1936-1941*, edited by James L. W. West III (Cambridge UP, 2008), xiv.
- (7) フィッツジェラルドは、1928年にパリでジョイスと夕食を共にした際に、ジョイスが自身の小説の執筆状況について彼に語ったことを、パーキンズへの手紙で記しており、Brucoli はこの小説を『フィネガンズ・ウェイク』だと同定している (Brucoli 264)。
- (8) Ilana Harlow は、“Finnegan’s Wake”における死者の復活を、アイルランドのフォークロアの伝統に位置づけている (146)。以下、この歌からの引用は、Harlow の論考に付された歌詞に依拠する (166-67)。
- (9) 1920年に書かれた文字どおり “The I. O. U.” という題名の、出版業者を語り手とする作品もまた、戦死したと思われていた人物が生きていることが判明するというもので、その物語の結末は、その人物が(わずかな)借金を背負っていたという事実をめぐるものになっている。借金という主題は、フィッツジェラルドにとって早くから死と復活というモチーフと結びついていたと考えられる。
- (10) あえて付言しておけば、グレーバーは貨幣信用説を支持して貨幣商品説を否定しているわけではなく、(人類学者のキース・ハートに依拠しつつ)硬貨の存在は双方の説が正しいことを示すとした上で、貨幣の「二面の関係性」が、「恒常的に政治的係争的であった」ことを論じている (113)。

### Works Cited

- Brucoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. 2nd ed., U of South Carolina P, 2002.
- Fitzgerald, F. Scott. “Financing Finnegan.” *The Lost Decade: Short Stories from Esquire, 1936-1941*, edited by James L. W. West III, Cambridge UP, 2008, pp.50-58.
- . “The I. O. U.” *I’d Die for You and Other Lost Stories*, edited by Anne Margaret Daniel, Scribner, 2017, pp.3-16.
- . *A Life in Letters*. Edited by Matthew J. Brucoli, Touchstone, 1995.
- . “Pat Hobby Does His Bit.” *The Lost Decade*, pp.148-56.
- Gleason, Edward J. “Going Toward the Flame: Reading Allusions in the *Esquire*

- Stories.” *F. Scott Fitzgerald: New Perspectives*, edited by Jackson R. Bryer et al., U of Georgia P, 2000, pp.216-30.
- Harlow, Ilana. “Creating Situations: Practical Jokes and the Revival of the Dead in Irish Tradition.” *The Journal of American Folklore*, vol.110, no.436, 1997, pp.140-68.
- Hyman, Louis. *Debtor Nation: The History of America in Red Ink*. Princeton UP, 2011.
- Mangum, Bryant. *A Fortune Yet: Money in the Art of F. Scott Fitzgerald's Short Stories*. Garland, 1991.
- Monteiro, George. “Two Sets of Books, One Balance Sheet: ‘Financing Finnegan.’” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*, edited by Jackson R. Bryer, U of Wisconsin P, 1982, pp.291-99.
- West III., James. L. W. *American Authors and the Literary Marketplace since 1900*. U of Pennsylvania P, 1988.
- デヴィッド・グレーバー 『負債論——貨幣と暴力の5000年』 酒井隆史監訳、高祖岩三郎、佐々木夏子訳、以文社、2016年。
- フリードリッヒ・ニーチェ 『善悪の彼岸 道徳の系譜 ニーチェ全集 11』 信太正三訳、ちくま学芸文庫、1993年。
- マウリツィオ・ラッツァラート 『〈借金人間〉製造工場——“負債”の政治経済学』 杉村昌昭訳、作品社、2012年。